

### 1.20年の継続が示すもの

20周年を迎えたASEP。夏に日本で開催されるWYMとの姉妹企画として長きにわたって継続的に行われてきたこの国際交流プロジェクトは、一定の成果と影響を示してきました。プロジェクトに関わった世界中の多くの参加者は、国際交流活動による学びや育ちを感じてきました。これらは、長きにわたる継続性を保証してきた成果であり、継続できた要因そのものでもあります。



### 2. 活動を支える

ASEPとWYMの国際交流プロジェクトでは、学校対学校のみで閉鎖的な状況ではなく、プレゼンテーション大会というオープンな場に臨むために、他の参加校との情報共有が図られ、またそれらの情報を活かしつつ深いレベルの交流を実現しています。プロジェクトのクオリティを維持して継続させていくためには、活動を支えるさまざまなしかけが必要です。華やかで盛大な大会の裏ではそれを支える交流の土台となる意見の交換や、主催者サイドと参加者側からのそれぞれの意見のすりあわせや、活動に関わる多くの手配や調整が行われています。



例えば、今回のASEP2019日本チーム滞在期間は、最も早い到着が12/22、最後の帰国が12/30でした。この間で参加各校の事情に合わせた異なる期間で滞在しました。ホスト校と調整を図りつつホームステイプログラムや文化交流とともにプレゼンテーションの準備が行われます。そして、ほとんどの参加者が滞在している大会前日と当日には、コアスタッフでのミーティングを二度にわたって実施しました。大会前日の12/26日にはWYM2020の台湾側窓口校である鼓山高級中學の校長と担当教員らとともに、滞在日程や時間に向けての課題などについて意見交換を行い、次年度の来日についてのイメージを共有しました。大会当日の12/27日には、プレゼンテーションのセッション終了後に高雄市教育局関係者とランチミーティングを実施。ASEP2020についての基本情報を共有し、今後の検討事項や今回のASEP2019で日本側として気づいた課題など、さまざまな角度から忌憚なく意見交換し、次年度につなぐ課題を共通理解しました。また、閉会式前には短時間ですが、次年度ASEP2020の担当窓口となる予定の私立中山高級工商職業学校と挨拶を交わし、今後の情報交換の約束をしました。

このように、例年、大会の進行と並行して、次のステップに向けたさまざまな調整も行っています。

### 3. 変わらぬ想いと変化に対応する柔軟性

このような連絡調整の役割を私自身はもう10年以上担っています。つまり、参加生徒の引率指導者としての対ホスト校とのやりとりなどの他に、ASEPとWYMを俯瞰的にみてさまざまな動いてきた部分

もあるのです。そんな全体を見渡す立場も踏まえて振り返ると継続の中にも時代に沿った変化がいくつも見てとれます。

変わらぬ想いとして、ASEP と WYM の柱となるのは国際協働プレゼンテーションです。海外の仲間と組んでプレゼンテーションを作成して発表を行うことがで、交流が促進されるという仕掛けです。この基本的なスタンスは普遍的なものです。これを大切にはぐくんできたことが、大きな成果と歴史を紡いでいるのです。フェイストゥフェイスの交流の必要性和有効性は何ら変わるものではありません。

一方で変化を感じる部分もさまざまあります。最も大きく感じるのは、ICT を活用した国際交流という視座から見た環境の変化です。ネットワーク機器の普及と発展に支えられてこの20年で ICT の環境は大きく様変わりしました。メールでのやりとりもままならず、TV 会議は高額なコストのために気軽に実施できなかつた20年前。その後劇的な進化を遂げてきた ICT 機器にもなって、TV 会議はいつでも実施可能に、メールでのコミュニケーションもさかんになりました。さらに近年では SNS による交流が主流になり、もはや定番の交流相手とは TV 会議の機会をわざわざ設定する必然性すらなくなってきました。このような変化に柔軟に対応することも継続的な国際交流には重要なポイントといえるでしょう。

また、滞在する台湾高雄市の様子も年を追って変化してきました。ASEP がスタートした頃には鉄道網が整備されておらず、チョットした移動は基本全て車だよりだったのですが、近年は高速鉄道と MRT などの整備が進み、高雄市内では公共交通機関の利用が便利になりました。市内を流れる愛河は遊覧ポートこそ運航していたものの、お世辞にも綺麗といえるような状態ではない悪臭を放つ川でした。しかし近年、水上スポーツを楽しんだり、学校の授業でのアクティビティが実施されたり、遊歩道や自転車道が整備され、夜には美しくライトアップされる立派な観光資源となりました。また、当初は台北で国内線や在来線の特急列車に乗り換えて高雄に移動していたのが、高雄空港へ飛ぶ日本からの直行便も徐々に増え近年では LCC の複数の航空会社が乗り入れており、時間的にもコスト面でもより手軽に参加できる方法が広がってきました。

#### 4. これからの展望

これまで何度も述べていることですが、今後の課題として、コアスタッフとして動ける人員の拡がり と継続的確保が必要です。ここまで長く携わっているコアスタッフはとりあえず元気に活躍してはいますが、もう20年もすれば、私も含め多くは引退しているでしょう。新たな世代へと引継ぎ続けられる体制でなければなりません、今のところこの人員面の確保が完全ではありません。

ASEP、WYM は、スタッフの努力で継続性が保証されています。20年の間、コアスタッフを中心とした話し合いと調整で推進しました。この素晴らしいプロジェクトをこれからも末永く継続させるために、これからも多くのみなさんの協力が必要です。

